

# POETIX (ぽえていっくす) 序説 新しい人麿へ

白石火乃絵

はしがき

序説では、具体的にすでに書かれた詩を引用して論じたりはあまりしません。便利道具とその由来をおもに示していく。生成AIとはちがう不思議道具を提供してみたい。実際、ChatGPTには魔術力があるようで、というかひとはどうにも新しいテクノロジに魔術をみいださずにおけない性があるらしい。そのオリジナルギンスタが文字という道具だ。文字はまず法として、宗教や国家の規範力となった。が、同時に、文字は詩というアベルをも生み出す。盲目のホメロスは、口承詩をうんだ。が、文字の詩ができてからあとで詩と呼んだので、それまでは口承文学、いやこの文学にも文がある。つまり名前のない何かだったと考えたい。とにかく詩は、どうやっても文字で書かれる声なのだ。文字という毒の血清と書いたこともある。わすれがちだが生成AIも文字だ。しゃべるやつも、いかに口語体であろうと文字を読み上げている。文字がなければ、これをめちやくちやあつめてアルゴリズム活用してうんぬんかんぬん出来ない。そして、生成AIが来る法と化す循環は、文字に化かされてきた有史人類のいち反復を演じてでも不思議でない。わたしはそこに魔術をみいだす蒙昧な人間の側にむしろ興味がある。詩はこのじっさいはただの自動機械にすぎぬ無機物に、人格や神性やもしかしたらエロスさえも見出す奇妙な心がつかまえる。知恵はどんなにインターネットの情報を集積し「学習」したとしてもそこにはない。ただわたしたちの原生生物それ以前、ただの原子だった頃からの記憶をもつこのからだにある。

このからだの知恵は、心という無知蒙昧な可愛いやつをとおすことでしか得られない。が、この心というやつが面白いやつで、知恵をたずねず、あることないこと妄想によつて無知を埋めようとする。陰謀論もカルトもみんなこいつが作り上げる。致命的にあたまが悪いので（ほんとうはそこがいとこなのだが）ChatGTPにウィズダムを求めもする。これを水色野良猫型ロボットに入れれば、明日とはいわず、話し相手としてただだがドラえもんは抽斗から出てくる。ボールのうたうレットイットビーのウィズダムのように、擬似母性としてのソフィアちゃん。それがこの機械だ。詩人は、その太母たる文字を相手に何千年もジャイアンへの仕返しを相談し、やつぱりさいごは痛い目をみてきた。詩をかく、一文でもいい。するとそいつがしゃべりだす。この対話と、ChatGTPとの会話は、かなり似ている。調教だつてしすぎるくらいしてきた。機械との会話にはまったら、詩はすぐそこだ。

詩は、この世のすべてだ。だから詩の理論は、この世のすべての理論だ。POETIXにはこの世のすべてを解き明かしたい野望がある。だれもまだ、詩によつて解き明かされた世をみたことがない。みたら、あと三万年くらいはひとびとは詩の中毒になり、やがて文字を捨て、詩でもつて会話するようになればいい。この面白さを越えるテクノロジーはまた詩によつてつくられる。詩をすべての中心に発達する科学技術はどんなだろう。SF小説とは順番がちがう。テクノロジーの発達や荒廃は夢をみさずが詩は夢みる。ボードレールはいう「この世がいい世であるかは、詩人を基準にみればいい。彼らが幸福ならいい世だ」わたしはもうめちやくちや不幸でしかたない。幸福になれなくても、幸福になれる世を想像してみたい。想像するためには、現実に関をおろしたたしかな根拠がある。ほこりをかぶった原理論というやつだ。まだ動く。こいつで新しいトランジスタラジオをつくらう。

音楽には理論がある。音楽家になりたかったわたしには、本能だけで曲をつくることも、理論の上で曲を書くこともできなかった。エレキギターの申し子ジミ・ヘンドリックスは楽譜がよめなかったというが、たとえ「言語化」できなくとも、言葉にできない彼の経験に理論がなかったということはまず考えられない。WALKMANにもし1アーティストしか入れれないとなったら、彼がその演奏をきくために皿洗いのアルバイトをしていたというアート・テイタムと悩み抜いた上でわたしの撰ぶチャーリー・パーカーは、理論開拓者だ。この不幸な兄貴から勝手に学び取ったアティテュードを生涯貫いたマイルス・デイヴィスも、彼がみつけたときは芋い田舎のサックス吹きにすぎなかったジョン・コルトレーンももちろん大理論家だった。最高の音楽家モーツァルトだって理論は朝飯前だろう。みんな大好き（ぼくは嫌い）ビートルズ、かれらはちっとも理論を知らなかった。たぶん不名誉とおもひかえに音楽からの寵愛をひとりじめしているカニエ・ウエストも理論はさっぱりだとおもう。彼らにはいわば生得の理論がありそれを奏でることはできても言葉にすることはできないので、かわりに彼らから理論をひきだそうとするオンチどものひこええすることとなる。令和の京極殿・米津玄師はたぶん理論の変態だ。理論に通じているかどうかは、良いアーティストの条件に関わりない。だが、理論（言葉にできる）なければこの世のいい音楽は少なくとも減りはする。ビートルズがきけてもバードのきけない世はさびい。理論は無力なのがいい。わからなくても何の支障もなく、わかったところでそれでどうということはない。実践も意味がない。けっきょく本能に任せて書くだけだ。わたし自身そうだ。だが、ほんのたまに、求めてもなかったとき、八咫鳥のごとく導くかもしれない。八咫鳥も無力だ。ただこいつ自身が無力なゆえに、その奥にふしぎな逆光線をおってくる。

の  
占  
バ

びーしーす  
想

めーろーす  
聲



りすーろーす  
律

〈本居宣長／菅谷規矩雄〉

めたふら  
喩

万  
の  
葦

歌意  
(リリッパ)

韻律  
(フロウ)



構成  
(パース)

〈ヴィトゲンシュタイン／吉本隆明〉

音韻  
(ライム)

一  
〈祭〉  
01

占  
バ  
万

詩想軸  
(金子みすゞ)  
(あ・空)  
八目止見  
乖離症

暗喩軸  
(左川ちか)  
(え・水)  
オワイリーア  
統合失調症



実感軸  
(永瀬清子)  
(お・土)  
デューマール  
神経症

〈中村文昭／空海〉

感情軸  
(林芙美子)  
(う・火)  
おじ  
躁鬱症

あ  
葦  
の

思考  
Denken  
(肺／喉)

直観  
Empfinden  
(腎／鼻)



感覚  
Intuition  
(胃／舌)

〈ユング／三木成夫〉

感情  
Fühlen  
(腸／腹)

バ  
葦  
あ

北

西



東

〈宮沢賢治〉

南

あ  
葦  
万

冬

夏



秋

〈折口信夫〉

春

デジタルアナログ      あ に ま し お ん  
D Digital-AnaLogue    あ (ANIMAFLOWN)    バ パーチャルの果て  
占 詩占い    葦 考える葦笛    万 万葉集試訳    あ Let's go Crazy!

まず、右下の〈祭〉の○から見る。ゲイヤル ……のてんてん 〳も入ってる。読者にはぜひ書き込みを

お願いしたい。冬から春に↓。春から夏へ。夏から秋。秋から冬。砂時計みたいなの字が浮かび上がる。季節といいそうだが、まず節というの（指の節→デジタル）は、大陸からきた（指の節→デジタル）digitusなので、ここには適さない。季というのも中国語で兄弟姉妹四番目の末っ子から転じて物事の終末（おわりすえ）をさす。ここには早くても遅くても何度でも始まる始まりしかない。それが〈祭〉。

この〈祭〉を中心に春夏秋冬がある。まず冬から春になるのに祭がある。ここできつきの季節といつしよにきみにはもう一肌脱いでいただきたい。油も塩も塗れとはいわない。が、あたまのネジは2本くらい抜いたうえでできるかぎりぴたりくっついてきてください。冬に春きたり、春は冬（夏）きたり、冬（夏）に春（秋）きたり、春（秋）は冬きたる。これが少し前のひとびとの祭の考えです。一年は、いまでいう春夏てんてん秋冬で、繰り返しの二回とすることになる。冬と冬（夏）とに大切な祭をする。その祭をふゆまつりといい、これがやがていまの季節としての冬の義に移転される。冬と冬（夏）の季（おわり）（春と秋のはじめ）にやるのでふゆから冬にうつってゆく。夏のふゆまつりの名残がいまのたなばたやお盆などです。ただ新暦七月七日にやる七夕は夏の季でないですし、家庭祭祀のお盆も廃れつつある令和には八月十五日の終戦記念がとって代わるかもしれません。この日を鎮魂祭（フユマツリ）と思うついで「鎮魂」のよみ方（意味）、行為じたいのうつりかわりに耳を傾けておきたい。生き急ぐ読者のため、この話がなぜ詩の理論になるか、簡単にいつておけば、さっきのの字をたとえば〈文法〉の○に同じ向きで書き込んでいただきたい。歌意から文法をへて音韻へ↓。音韻から韻律へ。韻律から文法をへて構成へ。構成から歌意へ。歌意はふたたび文法を通り音韻へ。これが出来上がった詩だ。出来上がるまでの鎮魂過程で

もあるが、出来上がってからもこの循環をくりかえし「文法」の力を汲み自立してある。「祭」と同じくここでも根源としての「文法」を意味する。（生成文法でない）ここに気づいたのがわたしの見立てではヴィトゲンシュタインで、背中合わせに言語の美としての自立の理論を追求したのが吉本隆明だ。ほかの〇でもだいたい思索者／詩作者、また両性具有者から学ぶ。ラップ（バトル、フリースタイル含む）もむろん言語表現なのでこの「文法」に基づく。もつといえは舞踏も、演奏いわば音楽の比喩で語れる全藝術表現（絵も）にあてはまる。言葉遣を遣わない「非言語藝術」も、いや、人間の全表現が根源の「文法」（ゆ）従言語藝術だ。「祭」は詩の女神への捧げ物としての奉り。（まづ（原義でない））「祭」中の演奏の奏に続きに藝術の根に近い。（……の〇3つとへ心）の〇は少し違う見方が要る。翻って「祭」の見方もまた深まる。「時期で言ふと、もに籠る時が冬である」（「原始信仰」）もに籠る、とは「我々には、もにこに思へますけれども、実は物の中に入って外に出られないといふことなのです。何の為にさうするかといふと、我々は謹慎して居るのだと思へませんが、謹慎は勿論謹慎ですが、穢れてゐるから謹慎して居るのではなく、身体が空っぽになつてゐる為に、身体の中に物の入るのを待つて居るのです」（「上代葬儀の精神」）。中学三年の冬わたしが初めてうつ病になつたとき、母は随分憔悴したようだ。何とか起こそうとするのだが、布団から動かない。しまいには自身が骸骨のように痩せてしまった。うつ病は、折口のいう「身体が空っぽになつてゐる」健康な状態であつて、活動力（物）の入るのをちっと待ちじつはやがて外に出るために欠かせない重要な期間なのです。だからほんとうは慌てることなどなかったのだ。うつ病者とその身近な人のためにもわたしたちの根本である魂の生活について、現代精神医学と

いわず来し方から学べることこそ甚大なのです「だから、其物が入ると直ぐに『も』から出て来ることになるのです。此は年中行事の中にあることで、『冬籠り』といふことがそれであります。春の枕詞になつて居りますが、実は、冬ぢつと外へ出ないで籠つて居ることを、冬籠りと言ふ様になつてゐますが、実は、植物の上でなくて人間の生活にあつたのを、植物に移して言つて来たのです」（同前。）こんど「物」というのが「外来魂」という言い方になり、もに籠ることがものいみとなる。さっきからもというのは何かよくわからないが籠るための未詳の道具（折口は布団よの何かを考えている）と留めておく「かうして、完全にものいみが遂げられた時に、外来魂は来触して、内在魂となる。古語ふるは、此作用をあらはした言葉である」（「原始信仰」）折口はこのふるがふゆのものと語という「即、ふるは、単なる接触の意義を持つたゞけでなく、衝突・附着の古義を持つて居た。さうして、此儀礼を、たまふりと言つた。第一義の鎮魂である。鎮魂を、悪霊を押へる為の行事と考へるやうになつたのは、後代に於ける意義の変化である。ふるなる語も、発音が変化して、これがふゆになると共に、意義にも分化を起して、増殖の意味を持つやうになつた。来触・附着から転化して、内在魂の分割と言つた内容を持つ様になつたのである」（同前。）ふるからいまの殖えるの古語でもあるふゆがなつたという。殖やすにもなつてくる「それから、尊者の分霊を受けて、その威力にあやかると信仰が発した。又、尊者の分霊をうけるといふ事は、一面に於て、恩寵を蒙る事になると信じたので、それから、みたまのふゆなる古い用語例が生じ、それを分け与へられる祭りをみたまのふゆまつりと言ひ、その祭りの行はれる時期を以てふゆと称した事から、後には、ふゆなる語が、冬期を意味する冬に固定して、季節をあらはす言葉となつた」（同前）ゴシック体にしたところも大事で、ここ



は六つの○中の〈文法〉を踏<sup>ふん</sup>まえて述べている。「民間語源説」という言葉があるようにこの語源の説（とくに地理関係）というのは九割九分信頼がおけない。こゝで POETIX にはチェック機能もある。〈文法〉の○に〈祭〉と同じ向きでさっきの↓でめの字を書き込む。すると上の「歌意」<sup>(リリック)</sup>（たとえばふゆ二字でも広義の歌とかんがえる。歌の意味すること）と下の「音韻」<sup>(ライム)</sup>のあいだには〈文法〉がある。「音韻」<sup>(ライム)</sup>から「韻律」<sup>(フロイ)</sup>、「構成」<sup>(パース)</sup>から「歌意」<sup>(リリック)</sup>は〈文法〉の関を通過しない。また、「韻律」<sup>(フロイ)</sup>と「歌意」<sup>(リリック)</sup>、「構成」<sup>(パース)</sup>と「音韻」<sup>(ライム)</sup>のあいだには↓がない。こゝで〈祭〉の○の……の……<sup>(テンテン バックスラッシュ)</sup>を書き込んでみる。谷折すると「韻律」<sup>(フロイ)</sup>（春）と「構成」<sup>(パース)</sup>（秋）と、「韻律」<sup>(フロイ)</sup>（夏）と「歌意」<sup>(リリック)</sup>（冬）と重なる。「文春」と醜聞みたく。〈文法〉とはこゝではふゆの遣われ方だ。ふるからふゆへ音がうつることとその遣われ方が変わり、文脈のなかで「構成」される意味が変化してくる。また、ふるからふゆに音がうつっても折口信夫はふたつの語の遣われ方（〈文法〉）を古典文献をあらったうえで説をうっている。素人としてはふゆは殖えると短絡したくなるがそうするとふゆの手前にふるのあることに気づけない。〈文法〉は遣われ方であるが、根本は遣い手とそのりずいんのもつ感性の思想にある。「歌意」「音韻」「韻律」「構成」これらのどこに違和感があっても反省に出会うし、なによりも〈文法〉からまず想わねば、シーンに対す RESPECT なき絡繰屋<sup>からくりや</sup>、毘売<sup>わなう</sup>りにおつ。ヴィトゲンシュタインなら、その「言語ゲーム」に加わるというだろうか。これは祭に参加するのと同じく命懸けだ。言葉や歌をわかうと、するといふのはそういうことだ。こうであつてほしいという手前勝手な願望を、相手に押し付けることとわかうとすることは無縁だ。そうであつてほしいという願望を抱いたとき（たとえば神や幽霊がいてほしい）すぐそれがそうであることになる（神はいる。幽霊はいる）短絡癖が、川向うの信じると



いうことと同じにいわれる。「陰謀論」では事実そうとわかれば安心だからそのおの心が根拠だということになって未詳の事実までそうということになる。これは信でなく不安とすべきだ。神社巡りや歴史考察に熱心なひとびとは、けっして信心深いのでなく不安がそうさせている。キルケゴールは「教会は異教徒をさし罪深い人々というが、これは教会が自らを失くし、相手に自らを与えているのと同じだ」という「なぜなら、キリスト教の核は罪であつて、正しくはその罪をもたない人々のことを異教徒と呼ぶのだから。彼らはただぼんやりと罪の予感の手前、不安のうちにあるというべきだ」(『不安の概念』から記憶で大訳)そして大事なのは、この不安こそが、精神到来の前触れにして絶対の条件なのだという。さきの折口信夫のいうものいみして待つ「物」や「外来魂」と、このキルケゴールの「精神」とは、庶物崇拜と一神教の懸隔よりはぜんぜん別でない。たまたまある精神が活動して、そこから墮落、世俗権力とむすばるかたちで諸々のキリスト教会がなつたので、イエスもまたものいみする一個の強大な不安あるいは深大なうつ病者にほかならなかつた「はるもその如く、かうして外来魂が附着して、ものいみの状態を脱することをはる」と言うたのだが、これが、はるまつりという過程を経て、後には春期を意味する春となつた。とにかく、年の暮から初春へかけて、魂に関する種々の行事があるのは、此信仰から発して居るのである(同前)ふゆもはるもいまのわたしたちの耳には「自動詞」のように聞こえるが体言(名詞)も用言(動詞「形容詞」etc.)も未分化だったときの〈文法〉を想わなければその空はずつと暗いままだ「冬籠りして其上ではるの状態が来るのです。はるといふことは、普通、発するといふ意味らしいですから、つまり、露出するといふ意味になります。これに一番適切なのは沖繩のはれのあそびといふ語があります。あそびといふことは、沖繩では、

日本の古い語と同じく、神事の踊りです。はれのあそびといふことは、素裸になつて春、口といふ巫女たちが踊ることです。其をはれのあそびともうちはれのあそびとも言ひます。で、此はれといふ語は着物にも晴着など、言ひますが、そのはれぎといふ言葉もその系統から説明して行けるのです。ともかく、**沖縄などへ参りましても、或は日本語の古語の使ひ方を見ましても、**はるといふことは、外に出て行くといふ語です。で、冬籠りといふことが春の枕詞になつて来るのです。さうするところ、に、暫く寝て居たものが、起きてきたと同じやうな状態になる訣です」(「上代葬儀の精神」)「民間語源説」だと、春は芽が張つて地面から顔を出すや、たんに晴れるということになる。どちらも外に出て行くことではあるが、ちがうのははるがじぶんのからだの外に出て行つてしまつて外から観察されていることだ。服着たまま「**文法**」の外につつ立つてる。もういちど引用すれば「かうして、完全にも**い**みが遂げられた時に、外来魂は来触して、内在魂となる。古語ふるは、此作用をあらはした言葉である」あえてふゆへと分化させずふるのまま「ふる・まつり」ということを考えてみますと、わたしが詩の理論においてます「**祭**」から始める訣がみえすいてくるかもしれない。先回りすれば「**内在魂**」にふる。「**外在魂**」や「**物**」とは《**言葉**》です。「**今までのところでは、**まつりの語原が、あまり説き散らされて、よしあしの見さかいいつきかねるほどになつてゐる。その中では『**祭りは、献りだ。政は献り事だ**』と強調して唱えられた、**先師三矢重松博士の考えが、まず、今までの最上位にあるものである。／まつるといふ語が正確にわからないのは、古代人の考え癖がのみこめないからだと思ふ。神の代理者、すなわち、御言実行者の信仰が、まず知られねばならぬ**」このみことというのがわたしがさつき仰々しい二重尖括弧をつけておいた言葉というのと同じです「**みこと**

とは神の発した呪詞または命令である。みことを唱えて、実効を挙げるのがもつである。『伝達する』よりは重い。神に近い性格を得てふるまうことになる。み言の内容を具体化して来るといふ意義が、まつるの古い用語例であつたらしい。それは、またす・まつるの対立を見れば知れる。語根まつをるとすとで変化させている。使・遣という字が、日本紀の古訓には、またすと始終訓まれている。まつりだす・まつだすなどとは、成立を別に考えねばならぬ語であつた。意識すれば、命を完了せしめるといふようにも説けよう。み言を具体化してやる。こういった意義が、まつを中にして、通じている。その実現した状態を言う語が、また(全)しなのである」(『古代研究』)不安をひとはものいみせず、すぐ解消しようとする。全けむところまでいつて言葉をやがものにしようとしなない。だから「言葉は嘘をつく」「言葉じゃない、大事なものは」ということになる。だが言葉は祭において必ず実現する(冬籠りものいみまたしふゆ詩はる)心<sup>L</sup>浄<sup>c</sup>き者<sup>t</sup>に<sup>s</sup>常<sup>g</sup>に<sup>o</sup>春<sup>c</sup>祭<sup>r</sup>あり<sup>a</sup>わたし<sup>z</sup>の十代祭体験をそこにいたかのように描いたのはまだ折口信夫しかみない「来訪神のあつた時、此神の威力を表現し、其によつて、邑落全体の生活が力強い威力に感染することが出来るようにするのは、そうした訓練や、表現が十分に保たれていなければならぬはずだ。来訪神をとり囲んで、眷属の形を以て、荒<sup>スサ</sup>まじい行動を振るわねばならぬ。／

そういう意味において、彼土における生活を表現するのは、この世の人間の表現力に俟つ外はない。(…)彼等の尊者が来迎する時、他界の事情はここに写し出され、この世と他界とを一つ現象として動いているものと実感するまでにせなければならなかつた。(…)飲びに裂けそうな来訪人を迎える期待も、寧猛な獣に接する驚きに似ていた。楽土は同時に地獄であり、浄罪所は、とりも直さず煉獄そのものであつた」(『民族史観における他界観念』)

予告 夏と秋については②で書く。秋の語源は断然おぼつかず、夏のは「民間語源説」を出ない。「飽く」秋、

「生る」夏というのは〈祭〉からみえてこないからだ、というより、語の音韻にたいし漢字をあてて意味をとく式の解釈それじたい意味分化を示している。ふゆ、はるが本稿でそうだったように、なつ、あきと表音

がなのまま述語文で意味が語れなければ語源説はなりたたない。漢字が舶来してからどんなに長くとも二千年は出ない。ニホン語は声の時代を三万から六万年の範囲でもつている。(こはの発生の初期をエラ呼吸のはじめに求めれば五億年。古本陸明心の現象論本論原了解以前)やま、かわなどにしてもすいぶん古い。

とかく本稿で読者にこれだけは了解せられたいのは、はる、ふゆは「季節」の名称でないということだ。季節とは外部の自然のうつりゆきのことでない。魂の状態や変化をいう「名詞」「動詞」「形容詞」などへ未分化の肉体表現だ。夏と秋とは語源説より具体的な祭祀を追っていったほうがよさそうだ。折口信夫も秋にかんして

はおそらくといったところまで、夏は語源についてはおしだまっている。わたしの好みでは「なづむ」の語根「なづ」が気になるが、纏った事例がみつからないのでまず採れない。なつもあきも漢字到来以前のニホン語であることは、もしそうでないなら「夏」ナツ「秋」アキというしかないのだ。中国語に「なつ」「あき」などという音はない。夏にかんしては「みそぎ」を元を取り上げ、そのポエジーの源泉力をたずねたい。あまてらす

とはなにか(夏)すきのをとはなにか(秋)がニホン語においては比較的大事になる。前者について結論からさきにいつておけば、たなばたひめだ。水の巫女。左中(肉体)の……○の左「暗喩軸」と深くかわる生活。

ニホン語美の最右翼。POETIXはニホン語のアンダーグラウンドへ冥界降りして、全世界の詩の原郷をめざす。

この「序説」は、だいたい一年ほど、連載十二回(各○二回ずつ)で仕上げたい。①②と二桁表記にして

あるのは「序説」のあとの本論?でも引き継いでいきたいからだ。POETIXは詩学、すなわち学問としての面も持ち合わせているので読者にはぜひ大いに(まったく豪華な願いであるが)質問していただきたい。学問とは質問のことだ。自問自答を基本としてわたしは書いていくが、連載である以上、読者からのリアルタイムの質問に答えていくことで予想しないダイナミックな展開があるかもしれない。henkou65@gmailか「偏向」Xの

DMでお待ちしている（質問内容は連載本文に引用させていただくことあらかじめご了承ください）白熱する学問をともにつくっていったらどんなにいいだろう。孤独は学問・藝術の源泉にして絶対条件だとしても孤立は必要善でない。学問が大学にしかないというの顔のない権力のおもうつぼだ。ここから一年は序説にかかりつきりになっていいと思っています。質問・批判にはわたしは全力で応答しようとするでしょう。打てば鳴る、とはかつてに自負しているが、いい打者にめぐりあうのがむずかしい。すでに何を言うかでなくどう言えるか、今回はおもしろくなった、いけなかった、フリースタイルの次元で表現をとおしてしか考えられない全領域がPOETIXの学問対象だ。まず学が立たねば詩論などどんなにあげくれようと同業者間のおしやべり（こいつが藝術をおわらせる）をでない。〈祭〉なき春夏秋冬のごとくさぶい。そして質問の来ることはないことはよくよく承知しているつもりだ。令和にあつては人に質問するということは自分はおまえより頭がわるいといっているのと同じことになると思われているようだ。けれど欲求としてはあるので、口のかたいChatGTPなどにはずいぶんいいにくいことまできいている。人に質問しても「ググレカス」などといわれるのだから無理もない。認知症研究の大井玄氏によれば、わたしたちがのおの全体感として（無意識含む）感知している〈世界〉のうち視覚でとらえているのはその十万分の一ほどにすぎないという。人里離れた土地など旅すればすぐわかるが、インターネットで得られる情報はもうほとんど役に立たない。未知へは全くひらけてない。入口まではみちびかれても、そこからは生身と出会いとによって蒐めるしかない。そこからさがが本題なのだが、非常に興味深いことにわたしの年下の知人の幾人かをみると、ネットの情報をなぞり、端緒までついたところで満足がいくようだ。人類の叡智（情報化できないのだが）のうちインターネットから得られるのはたぶん一兆分の一にもみたくないなによりまず自らの体験、これからのもそうだが、そんなのより幼少の頃のこと、ほんとうによく忘れている、そいつを思い出すだけでいったいどれほど恵みが得れるか。質問はまずここであらう。あへと育てよう。ものを知るにはまずわかっているとおもっていることから未知へとかえしわたしたち自身の無知を知るのが初まりだ。

（山本哲氏談「Yohutube」山本哲士「卓本隆明」心的現象論「目の知覚」アプロード「目」2016/6/3）  
認知症研究の大井玄氏によれば、わたしたちがのおの全体感として（無意識含む）感知している〈世界〉の

（上記動画では客観的世界といっている）

（ネットにはむしろイカガワイ情報や政治的不妥当性がころがっているが醍醐味だったのだから生成AIもこれを平らげてしま）

追書「鳳尻紀」12月号（一年前の）に「鳳尻紀執筆予告」を書いた。そしてPAGE4の下に示した七つの原稿の予告を行っている。これらをこの「序説」の六つの○に重ねあわせると大体どこにあたるかを同頁に書き込んでおいた。下線を引いた「Digital-Analogue」〔ANIMATION〕「バーチャルの果て」が「偏向」を始めた当初からわたしが書くといってきた原理論の三部立てだ。さっき気がついたが、六つの○をみていくとこの三部がリレー形式となっている。略号で示せば〈文法〉はD〈心〉はDからあ〈祭〉はあ〈ここ／そこ〉はあからバ〈肉体〉はバ〈むすび〉でバからDにバトンタッチして一周する。こういう風には示せるのだが、言葉や文章で説明せよといわれたとたん途方にくれてしまう。これまでも何度もチャレンジしてはいる（バックナンバ参照）今回この「序説」でようやく総合ができそうだ。一周するごとに各○の理会も謎も深まっていくので、周られるだけ周わってみたい。いつか六つの○もいらなくなるところまで。はしがきに『POETIX』にはこの世のすべてを解き明かしたい野望がある」と書いたが、たとえば経済学は〈心〉の○から延びていく線上にあり〈肉体〉のポエジーをくむ。ユングは夢における〈お金〉の表象を心的エネルギーの量的表現という。また記号化以前の金本位制、もともと昔の殷王朝跡でみつかったインドや東南アジア原産の寶貝（琉球でも産出していた）へ廻行すればたんなる希少価値でなく、それに何か不思議を感じた昔のひとのポエジーのありかたに経済学のフルサトをみることができる。太古のたまといえ、わたしたちは勾玉など想定しがちだが、貝殻や石ころなどもたまといった。のみならず弓や串も琴も篋も、そこに魂の籠もると感じられた物は皆たまと呼んだ。人間の約束事というのと、わたしはただの紙切れやスマホのタッチ一つで、桃や辞書が貰えるのがいまだに不思議でならない。不順な手続きで（見習いを経ず）魔法使いになったよううしろめたさもある。さいきん心暗くなったのは、わたしが聴いて育ってきたパンクロック（ここではニホン語に限る）までもが「お金で買えない価値」などといってきた、漫画でも「他人がつけた値段より、てめえの価値」と。



価値観、というのも非常に便利なことばだ。言葉尻にとらわれず、いわんとすることはわかる。値段とは完全に相対的だが、価値となると美的判断が入ってくる。が、価値はどこまでいってもみんなにとつてというニュアンスがまとわりついてくる「聴く（観る）価値ないよ」とか「絶対的な価値がある」とか。価値がそもそも絶対なら文法からそうはいわないだろう。いっても価値（値打ち）とはよしあしだろう。それよりか同じ経済用語をつかつていても「からだが資本」という慣用句のほうが価値はないが含蓄はあるようにきこえる。前世紀に新型コロナ・ウィルスよりも広まった「資本」などという有名無実の語が、ここでは正しい用法をしめしている。だから「からだが資本」の「資本」が「資本」という語の資本だ。パンクロッカーや漫画家は「お金で買えない資本」「他人がつけた値段より、ためえ（たち）の資本」といえばよかったのだ。商品はお金で買えるが、資本は買えない。また他人がどういおうと資本はすでにそこに働いている。なんといおうといまここにわたしのからだが生きているように。そしてからだはたえず栄養を要求しながら敢然として自らの死を育てつつある。心はからだの死にたいする超越の態度にどこかComplexをもつ。また私（自我）という意識はまったく応対がとれず、なるべくそっちのほうを見ないようにしてる。ニホンの和歌が心に価値をもっているのにたいし、詩がわが國でここまで不興を買って来たのは、詩はまさにこのからだが資本だからだ。「もののあはれ」という平凡な語におのが思想の全重量をぎつぎつにつめこもうとした本居宣長は、ほんとうなら『もののあはれ』を知るには和歌の発想からではだめだ」とまでいうべきだった。だが王朝和歌や俳諧にたいする価値観はけっして理屈でうごかせるものでなく、漢詩などもつてのほか、王朝文化復古の系譜のさいごだったはずの芭蕉とも、古典ロック・ファンとボカロ・ファンとのごとく互に素。短歌に俳句に口語自由詩が加わって、ニホンの詩歌句約百三十年、みごとにからみあわない三つ巴の対義語のような状況が続いてる。まるで令和のわたしたちのアタマと心とからだのばらばらのごとく？ だったら元手は一つ。三つ巴。六つ〇。



# POETIX

(ぼえていつくす)

## 序説

新しい人磨へ

白石火乃絵

びーしいす  
想

めーろーす  
聲



りすもーす  
律

〈本居宣長／菅谷規矩雄〉

めたふおら  
喩

詩想軸  
(金子みすゞ)

(あ・空)  
八百比丘尼  
乖離症

暗喩軸  
(左川ちか)

(え・水)  
オファイリア  
統合失調症



実感軸  
(永瀬清子)

(お・土)  
デューマーテル  
神経症

〈中村文昭／空海〉

感情軸  
(林芙美子)

(う・火)  
お七  
躁鬱症

北

西



〈宮沢賢治〉

南

東

歌意  
(リリック)

韻律  
(フロウ)



構成  
(パース)

〈ヴァイトゲンシュタイン／吉本隆明〉

音韻  
(ライム)

思考  
Denken  
(肺／喉)

直観  
Empfinden  
(腎／鼻)



感覚  
Intuition  
(胃／舌)

〈ユング／三木成夫〉

感情  
Fühlen  
(腸／腹)

冬

夏



〈折口信夫〉

春

秋

# Camille' up! 春夏秋冬

共に行こう 風の後を

二、〈祭〉② 【序説における〈祭〉完結篇<sup>フィナーレ</sup>につき①（前提）の三倍ちかい厚み<sup>ボリューム</sup>となっておりです】

秋とはなにか「Die Welt ist alles, was der Fall ist」かの有名な（そして無実ともいえる）  
ヴァイトゲンシュタインの『論理哲学論考』ドイツ語原書の第1文です。同じ一九二二年の  
独英対訳版の英訳では「The world is everything that is the case」これならわが国の義務教育  
レベルでも直訳はできるだろうと思います、この世界はケースであるところの全てだ、と。  
caseはふつう論理学の翻訳語で「事態」と訳されています。わたしたちの日常語で「事態」  
といえば、つい最近ではCOVID-19の「緊急事態宣言」でしようか。イギリス語の著名作で  
『The Case-Book of Sherlock Holmes（シャーロック・ホームズの事件簿）』の「事件」というのは  
いかが。どうやらcase（事例、事態、事件、訴訟、症例、実情etc.）には、対岸の火事<sup>お隣の火事</sup>でな  
くわが身が（言葉の上で想い浮かべているにすぎない時<sup>とき</sup>でも）その禍中<sup>わざ</sup>にある事<sup>こと</sup>といった  
ニュアンスがあるらしい。わたしの十代のバイブルだった湘南や横浜の暴走族をモデルに  
した漫画のせりふでよく「そいつアコト<sup>こと</sup>だぜ」などとあって、あたかも読者のこっちまで  
起こりつつある事態<sup>こと</sup>のキナクさに包<sup>くる</sup>まれてあっちとこっちのさかいがなくなる。英訳で  
もこの肌感<sup>ゾクゾク</sup>は保たれているが、論理学はその習性としてこのコトをがらす・ケースに容れ  
死物化<sup>ゴクゴク</sup>してしまう。ヴァイトゲンシュタインがこのときやりたかったのは、論理の学でなく、  
論理を哲学するコトだ。この風狂いの哲学者が論理（A is B, is T/F）という水晶宮に籠り、  
内から死に物狂いで撃ちまくって覗けた虚空より降りきたったのが、わたしの見立てでは  
〈文法〉という不思議だった。発見者はこのコトを心臓に抱えて水晶宮の外に出て来ました。

I know how it happened - I saw it begin

I opened my heart to the world and the world came in

"False Prophet" Bob Dylan

そいつがどう起ったか知ってる——ことの始まりを見た

ハートを開け放ったら、世界が這入って来た 「偽預言者」ボブ・デイルン

秋とはなにか。前章⑩を踏まえて、さきの一行目を飜せば「この世界はふるコト全てだ」夏のふゆまつりといいました。冬籠りしても。の。い。み。が。完。全。に。な。る。と。物<sup>コトバ</sup>がふる。すると。はる状態（全裸）で外に出て行く（はる）。夏の季<sup>おわり</sup>（極まり）もこれと同じ事態が起ちます。

みそぎする河せに くれぬ、夏の日<sup>いりひ</sup>の入相<sup>いりあひ</sup>のかねのその聲により 実朝（金槐集）

天の川 みなわさかまきゆく水の——はやくも、秋の立ちにけるかな 全

気の遠くなるほど古いコトを追っているのですから最低でも万葉集の事例を訪ねるべきとこですが鎌倉三代目將軍のこの源実朝という歌人（もうほとんど詩人と呼びたい）には永遠のティーネージャーたるエディ・コ克蘭も “She’s somethin’ else（彼女はコトだぜ）” とついうならずにはおけないほどのニホン語という河（文法）への沈潜力でもって水底より玉をひろいあげてきはる。この夏の季<sup>くれ</sup>と秋の立ちとの二首はあとで〈肉体〉の……○でもとりあげますが、少し先回りしていえば、一首目、夏・西・暗喩軸（え・水）・聲<sup>のいきなりす</sup>と〈祭〉〈ここ／そこ〉〈肉体〉〈むすび〉の四つの○をひとからげに表現しています。母韻に注耳すると、かはせにくれぬ……かねのそのこゑにより、と（どれもか行音につづけた）えの韻律<sup>（フー）</sup>によつて入相のかねの聲<sup>（めい）</sup>を響かせています。しかもこの入相の鐘はたんなる日没につかれる寺の鐘のことではなく西の海（“河せ”は海岸でもいいでしょう）の涯に沈みゆく日輪<sup>（夏の日）</sup>のイマージュが鳴り響かせる永遠の聲音です。四天王寺には現在でも春分秋分の日<sup>（じつ）</sup>に「日照観」という難波難に沈みゆく夕陽を拝む信仰がのこっており、その縁起<sup>（おこり）</sup>は空海によるとされていますが、仏教伝来（聖徳太子）はるか以前の民間信仰に実情<sup>（the cases）</sup>は遡るとみてええ。

ここで肝腎なのが「みそぎ」です。「河せ」は川（みそぎの元は海岸とする海人族の習い）の瀬で『万葉集辞典』（折口信夫）は「川の波の立て、流る、処を瀬といふ。瀬は始終動いてゐる。浅い場処。底は小石だ。『松浦河河の瀬光り鮎釣ると立たせる妹が裳の裾ぬれぬ』（巻五・八五五）。せは又、時・場合と訳すべきのがある。『ちはや人宇治のわたりの速きせにあはずありとも後も我妻』（巻十一・二四二八）。古事記に『苦瀬にしづまむ時』』という。夏の季に土佐の海へんを旅したとき、わたしは海岸でみそぎする巫女をみた。夕風すでに寒き時に汀少し水に這入ったせに白の巫女服（裳か）しゃがみこみぢつともいみしめてる。たしか金曜であくる土曜には田里のほうで刈りまつりがある雰囲気だった「Die Welt ist alles, was der Fall ist」大学七年生まで持ち越した必修単位のためテレワークで習初めのドイツ語でわたしは獨語したのを覚えてる「この世界はいまわたしの立ち会、つて、いるコト全てだ」そういう気持を口なじみのない韻律にこめて。英語でthe caseと訳される独語のder Fallをいま初学者向けの『ベーシッククラウン独和・和独辞典』でひくと①（英 case）②（英 fall）とある。英語のfallにはcaseに近い意味はない。『旺文社レクシス英和辞典』訳語一覧に【動】落ちる 倒れる 下がる なる【名】落下 降ること 転倒 秋 滝 低下 とある。der Fallのすぐ下にはその動詞形fallenがあり英語の動詞fallとほぼ同用。インターネットで語源を調べると原始ゲルマン語fallananに辿りつく。これが古英語に這入ってfeallan→fall今度caseを調べると、ラテン語cāsum（起ったコト）とcadere（降る）の過去分詞と出る。古フランス語をへて古英語cas→case つまりドイツ語ではその祖語をそのままに受け継ぎ、海洋国イギリスではゲルマンとラテン両系の「降る、落ちる」転じて「起ったコト」を表わす猿似語が移民して現在のfall→case→TPOの棲み分けがなったというコトらしい。

滝は落ちるのでいいとして、秋fallはどうしたかというところ、どこかで書いたことのあるような話だからぜひしておきたい。十四世紀までは古英語herfestは「作物を集める」という意味だったのがしだいに時期をさす名にもうつっていった(原始ゲルマン語のharbitasから来ておりドイツでは現在も秋はHerbst)十六世紀にこれがfallとautumnに置き代わり、英国ではautumnが残り、米国ではfallが残った。autumnはラテン語のautumnusが古仏語autumpneを経由して入った。羅autumnus(秋)はauctus(増加、augere増やすの過去分詞)にひかれてかautumnusともいう。これはエトルリアの変わりゆく年の神Vertumnusと縁があるかもしれないともいう(<https://www.etymonline.net/p/word/autumn>)。前章⑩に寄せれば、fallはふる、autumnはふゆに近い。夏↓秋は、冬↓春の繰り返しといった。夏↓秋も年越し〈祭〉で、ここに「変わりゆく年の神」がかかわってくるのも腑におちる。この神を「外在魂」「物」といいいい。インドヨーロッパ語族とウラルアルタイ語族とはシンタクス<sup>文法</sup>を完全に異にする。が、語の音韻世界と民俗<sup>祭</sup>とに降りてゆくと、少なくとも無関係とはいえないがたくなってくる。幻惑<sup>ある</sup>にも。試される瀬戸際だ。ひとまず我に還るといいますか。〈文法〉に立ち会ってみたいとおもいます。なつという音韻はどこから来たか。ふゆ・はるの時とちがい、わたしの探したかぎり折口信夫も夏の語源について一言も述べていない。わたし自身、ここ一年ほど執着しましたが、これというに足る事例は文献にも民俗にもちつともみつからない。が、言葉という物にこちらの(こうであつてくれたら)を恣<sup>はしむ</sup>なすりつけるわけにもいかない。夏が「力」でなく国語<sup>ある</sup>と考えられる以上はなづさふ奥がある。ここで国(語)学でも文献学でも言語学でもないPOETIX(保健学か)に則って「作業仮説」を立てれば〈肉体〉の……〇の暗喩軸(え・水)と〈祭〉の〇の夏とはアナロジカルになぶ

「なづさ・ふ 拘泥して早く行かぬ。(…) 水中一処に滞るといふ意にも使ふ。『やくもさす 出雲の子等が黒髪は吉野の川のおきになづさふ』(巻三・四三〇)」以上『万葉集辞典』は折口信夫の処女著作『口訳万葉集』の別冊として企画執筆され、両者ともち三十六年にわたる研鑽で自身乗り越えた所も多いといわれる、が、文章はそう簡単でない。以下『口訳』より「出雲の処女の黒々とした髪は、吉野川の川の真中につかつて、藻のように靡なないている」原文詞書に「溺死」とある。この人麿作歌には和製おふいりあともいうべきイマージュがある。折口の前任者・本居宣長は『玉勝間』で「万葉集に、なづさふという言、あまた所に見えたり、昔より此詞をときたる説、みなあたらず、今その歌どもを、あまねく考へ合するに、或は海川などにうかべること、或は船より渡ることなどにいひ、枕詞にも、引綱の、鳥じもの、にほどりのなどいひて、いづれもく、水に着くことにのみいへり、水にやらぬは一つもなし」『口訳』では折口もどこもこの宣長の水説を採っているが『辞典』ではあえて「水に着くことにのみ」といわず「拘泥して早く行かぬ」の意味を前に出している。まだこのなづさふからなつまでは浮かぶ瀬もなづさふ船もない。なづという語根を同じく万葉集にもあまたみられるなづむ(洪り、滞る、「水・雪・草などに足腰を取られて」『岩波古語辞典』)とから想定しても「民間語源説」をちいとも出ない。(祭)に立ってふゆ・はるの場合と同じくあきとつがいで考えねば立つ瀬文法がなくなる。前頁(口訳)へなづさひわたると、

柿本ノ人麻呂、香具山で人の死骸を見て悲しんだ歌

426 くさまくら旅の宿りに、誰が夫か、国忘れたる。家待たまくに

旅の泊りに寝て、家を忘れている人は、誰の夫であるのか。家では、さぞ待っているであろうに。(人麻呂には神の心が見える。単なる同情ではない。)

ちよつと想像してみていただきたいのですがこの『口訳』は壮年控える無名の元教師が、大阪からともなつて面倒みている（ちよつと今の吉本の芸人さんみたく）元教え子の一日三人交代で底本につかつた万葉集の歌をよみあげるのを口ではしから訳していったわが国最初の現代語訳万葉集です。想像する場面はクイズ番組（関西圏ではやらないそうです）<sup>…ディーデン</sup>「問題」へくさまくら旅の宿に……静寂……<sup>…ビンボン…</sup>「回答」「旅の泊まりに寝て……」沈黙……ここで<sup>あが</sup>了ることもあれば、口語の韻律に激したようになって、あるいはそれを鎮めるように時々「（まるかつこがかりのめざめ、ヴォイスで）人麻呂には神の心が見える。単なる同情ではない」沈黙。さすがに断言できますが『口訳』より百二十年、こんな遣り方で訳された万葉集は絶後です。人麻呂の見た神の心を見る目をもつた訳者も。ここにくさまくら……の歌ですが、いやこの歌に限らずたれのコトかニホン語はいわずもがなで通します「学校文法」で習う<sup>だれがうテアル？</sup>「主語」がない。なぜないかといえば「必要ないから」なくてわかる（なにが？）からです。もうここ六年なにをするにもわたしはV T u b e rの方々の歌やニホン語でのおしゃべりをききながらしますが、ときどき注耳しておりますと（平生ニホン語話者と生身で関わりのある方はその人たち相手でも結果は同じでしょうが）じつに「主語」なく豊かに話しておられる。そしてこちらもそれを了解できてしまう。むしろ、聴き手の側で補えるというほうにケースの要がありそうだ「今、石牟礼「道子」さんからびっくりするような、<sup>ママ</sup>紹介を受けました森崎「和江」です。ここに来て、心中ニヤニヤしたりあきれたりしていますけど、どうも「暗河」「同人雑誌」の人というのか、熊本の人というのか、サギ師ではあるまいかと思つて。先ほどの会合では以心伝心で「暗河」を出しているという話でした。わたしにはその以心伝心の内容が一向に伝わって来ないものですから（…）」「（わたしと言葉」森崎和江）



想像してみるにここでは聴衆の「暗河」の人というのか、熊本の人“たちは脊髄反射で笑ったとおもう。話はじめてこういう憎まれ口を叩くのはニホン語の《文法》<sup>(シー)</sup>においては「以心伝心」の挨拶と同じなのだ。が「植民地であつた頃の朝鮮慶尚来北道大邱府三笠町で生まれ」「生後十七年間、朝鮮で暮らした」「内地人「本土のニホン人」が植民地で生んだ」「このくに「敗戦後の母国」で、生まれながらの何かであるという自然さを主観的に持つていなかった」(『慶州は母の呼び声』)詩人にとって、その《文法》は「サギ師」のやりとりにか聞こえない。内輪へ外からやってきた者はけつして「以心伝心」の冗句などいえない(それはユーモアとよばない)のみならず詩人というやつは(小説家とちがい)かりに単一母語圏内だとしても挨拶という挨拶が(俳人ともちがい)出来ない。このときの森崎さんはいわば四重苦でまだユーモアまでもてなかったし、イロニーにでる余裕もない絶体絶命だった。思つたことをいきなり口にするコトなどいまでさえニホン語の《文法》にはない。「熊本の人」になつて続きをきく「いったい、これは何なんだろうと思つてみつめていたんです。みつめていても一向に分らないんで、やっぱり他所ものだなあと、さみしくてたまわんないんですよ。ところが、にこやかに石牟礼さんは、わたしを紹介して下さつて……。なかまのように、さらさらと」みなまで言つてもらわないと分からない、對話<sup>ダイアローグ</sup>にならない、さみしい……と彼女はいう。もしかすると聴衆の多くはこのとき生まれてはじめて他者を目の前にしたかもしれない。しかもこの他者は、じぶんたちとたぶん同じ血の流れを多く汲みかつ似たような言語を話している。そしてこう思つたかもしれない「いったい、これは何なんだろう」やっぱり他所ものかなあ。このシーンにいわせているのは「熊本の人」と森崎さんとわたしたちだけではありません。ニホン語もいっしょにくるしんでいる。

森崎さんの分からないは、極言していえば和歌が分からないよといっている。その〈文法〉が分からないといっているのだ。アメリカ留学帰りの母の宰領する個人主義家庭で育ったなどといってもきたわたしが、はてさてついこのあいだにも池袋駅で降りまた乗るとき、ICの出場記録がついていなかったの窓口の駅員さんに「きょうのお昼ごろ品川駅から来て出たんですけど出場記録がついてなかったみたいで……」即座に了解されて「入れるようになりました」改札をとおし（まーたやってるよ……）とおもう。というめきがでる。いまはむかしニホン語に「片歌」という形式ありまして、一人で五七七。それにもう一人が五七七かつ同じシンタックスでもってかけあう（主（その前は神と精霊で）に男女で）これを一人でやるようになる。「旋頭歌」となり（これは万葉集にみえる）さらに五七七・五七七の二番目の七が融解し（別に長歌の結びの五七七の影響もありつつ）五七・五七七の短歌形式が成立する。それでわたしの「……」を汲んで駅員さんは出場記録をかいて「入れるようになりました」と「以心伝心」かけあってくれたというわけだ。わたしの母方の祖母はこれを嫌っており、「いまの子はみんなこうだから意味不明でわたしや困るのよ」が、事實はいまどころか上古以前からそうだった。わたしも和歌が分からない口と思ってきたが、サギ師の手口だった。

草枕 羈宿に、誰孀か、國忘れたる。家待まくに（草枕羈宿爾誰孀可國忘有家待真國）  
くさまくら たびのやどり たがつま くになつ いへまた

「『待たむ』から『待たまくにあり』という語法ができ、プレディケートを省略する。それが『待たまくに』だ。待つだろうことである、という意味」（『折口信夫全集ノート篇』第十巻）  
（一旦そう言っておく）

省略というので「待つだろうこと（なの）に（忘れてある）」という反語による詠嘆でなく「待つだろうことで（ある↓省略）」と直訳するとわかりやすい。だろうことがまくなのは、  
（だろう）  
むむ（助動辞）+aku（後述）でニホン語では二重母韻がつづむのでuが溶け、mutaku→maku

いまのニホンの義務教育の「こくご」カリキュラムでは小学校二年で「主語」「じゅつ語」を習う。これは明治以降、英文法を鑄型として現東京大学の国語学閥を中心に鑄造された「学校文法」に則っている。英文法の基本はSVだ。体言（「名」詞、句、節、「代名」全）に動詞（用言は活用に着目しておりいまは関係ない。be動詞＋形容詞にしてもまず第一に動詞がなければ話にならないという観点でここは動詞とする）がくつつくのが文の基本だ。この基本にかかるメインの体言subjectを「主語」、動詞verbを「じゅつ語」と翻訳している。さきの**プレディケート**はこの「じゅつ語」にあたる。折口があえてこう言うのは、これはこうだ（である）と言い切るニュアンスを込めたかったのだとおもう、そしてニホン語にはそれを**省略**する傾向があると。ただ言わずに了う、いい方をかえれば、言わずに了えるのであって、**省略**というと基本形からさしひく意味で、そうでなくて、ニホン語において基本形はあらわでないから**省略**といわないほうがよく、表現のエコロジーでそうするのでなく、わたしたちのPOETIXでいうところの〈心〉の○でかむかふべき、宿命にも似た無意識の傾きがある。だから**省略**にかわる言い方は、現時点ではまだ提案する用意がない。またそれがいいかわるいかは、いいところもあればわるいところもなきにしもあらず、というほかない。ただその事例のあるコト。おや……とすると、ニホン語においていわゆる「主語」は文脈上必要なきときしか姿をあわさらないし「じゅつ語」は言われずに了うコトがあり、英文法において（仏文法でも独文法でも……SVを基本とする言語は世界中に八つしかない。スウェーデン語デンマーク語ノルウェー語オランダ語ドイツ語英語、ラテン語派生のロマンス諸語中ではフランス語と消滅寸前というスイスのロマンス語のみ）その基本とされるSVを（それぞれ意味合いは別でも）なくて了える（表現の完全を果たせる）

（金谷武洋「述語制言語の日本語と日本文化」調べる）

同じ球技でも野球とサッカーくらい違う「言語ゲーム」を同じ基本ルールで語ると同じことがガキあいてに行われていることになる。当然、教える側含め、だれもが文法はサギとは気づいてる。気がつきながらも足が洗えずにいる。サギを「サギだ（である）！」という**プレディケート**を先送りにして濁している。のみならず学校で教わる英文法さえも役に立たないとだれもが思っていることならちよつと前の「P P A P」の大ヒットが教えてくれた。ペンパイナッポーアッポーペン！は体言が体言だけで連弾して文あやをなせる**〈文法〉**と音韻のこちよい列コトびが「文法」の試験を通らずに（**〈文法〉**の関は通過して）（構成）ビートに乗って歌意のような something を表現しえたニホン語が英語に思い出させた美といつてよく、ただ役立たずの「英語」の教科書（情報商材）の例文をあるある揶揄しただけの笑いではなかった。「学校文法」という王の裸はだかっぷりを笑うのはいい。なら文法（一般）まで蹴飛ばしてよいか。文法はなんのためにあるのでしょうか。いwhat casesつどこで必要となる？ それは、自分を知るため。他者と出会うとき。この二つだと思います。自分を知ろうとしない者に他者が訪れることはありえない。なまなまのようななにかならできるかもしれない。けどそれはさみしい……

愛する人

とおい原始の野に立ち黙している人よ。

山間の祭りに火が燃えて

どよめきが林をうつる

ひそかに瓦の呪詛をぬけて今宵はだしで待つています。「朱と緑の肖像」最終聯 森崎和江

ここには他者にひらかれた**プレディケート**があります。きちんといいきって返事を待つ。初期の詩です。森崎さんはさい（はじめに）ごに本懷を遂げられるタイプの詩人にいらっしやいました。

「叙述語を切り捨て、了ふ理由は訣らない。ともかく、入り用な、大事な部分を切り捨て、しまふのである。此傾向が、どこから出て来るかと言ふ事を考へる事が大事だ」(『国語学』)戦後晩年ちかくに折口信夫が通信教材として口述筆記したこのテキストはわたしには一葉の置き手紙にもおもえる。そこで最後にとりあげているのがこの省略というコトであつたとくに平安期に入るとその成果たる源氏物語でも、あさまし・をかし・かなし・あはれの「あさましく……なり」「をかしく……なり」「かなしく……なり」「あはれに……なり」とつづくべき叙述部分が失われて、副詞的に感情の程度を示すにすぎない片割れ詞が叙述語として扱われるようになる。この省略の傾向は令和現代にもあさましく健在であつて例の「えぐ(い)」「やば(い)」「メロ(い)」「エモ(い)」なのだが、じつさいクラシックな国語表現だともいえる「えぐく……だ」「やばく……だ」「メロく……だ」「エモく……だ」の表現すべきブレイケートを軒並み「以心伝心」まかせにする。この習性が「どこから出て来るかと言ふ」とそういう生理がア・プリオリにわたしたちの心に種としてあつたのでなく「かうした語遣ひが、我々の気分の上に、さう言ふ習慣を作つて来たのだ」(同前。)またこの習慣が「かうよろづのつ、ましさを忘れぬべかめるをしも」(かようにさまざまの遠慮を忘れてしまひ、さうであるようなのをそれこそ、) (『東屋』) (『日本文法体系』藤井貞和より) というような助動辞の発展・ブレイケートなき動詞ニュアンスの子細化をうながすことにもなったという(現代のわたしたちにとってそれより前の万葉集より断然と源氏物語の原文のほうが敷居が高く感じられるのはこのためだ)「習慣を作つてきた」というからには源氏物語の突然発生でなく万葉古今後撰と進んだ詠歌の副詞撰択の意匠化が事態を設いた。見方によれば世界文学基準といえる高度な長篇ロマンをなした誇るべき文化資本ではある。

が、これは「或点から言へば、大きな弱点にもなる」「たとひ文学的には優秀性を明らかに持つてをつても、言語には尚、科学性の深い論理が重要なのである。おそらく、日本語の今後の行くべき所は、助動詞の発生原因が示してゐる様に、気分を豊富にし、感動を豊かにこめ、判断をきつぱり言はないと言ふ様な点から、脱却する必要があるのだらう。それは助動詞の表現に対しての、反省と言ふことが必要だと思ふ」（『国語学』）無実のまま古黴の生えたようなサルトルの「実存は本質に先立つ」という言葉をここでとりあげてもいい。情性からそうなっているにすぎない因襲を「伝統」と名づけこれにな。づ。んでみたり誇ってみたりしてみてもそれは内部の荒廃しかよばない。来客を拒否するうちは腐臭にうづもれてゆく。もいちど屍を生きづかせ外に咲かせる命が⑩にいう折口の「物」「外在魂」だった。プレイケートを省略する不安から源氏物語の「もののあはれ」（本居宣長）を開け放った花咲爺じいがあります。世界文学として通用するニホン語の宝・源氏物語と肩を並べる、いや凌駕しているのは「いひおほせて何かある（いゝきったところで何がのこる？）」（芭蕉）精神もつHAIKUだろう。いわばこれは、心閉ざす省略の本質を心臓開く沈黙の実存にふゆごもりまたしふるコトはるまつり（もののあはれ）だ。伝統を守つとは、このコトを何度でも何度でも全たしつづけるコトでしかありえない。でなければそれは空虚にな。づ。む。「みそぎ」とはしんじつこのコトであつた「拘泥して早く行かぬ」——たれが？——魂が

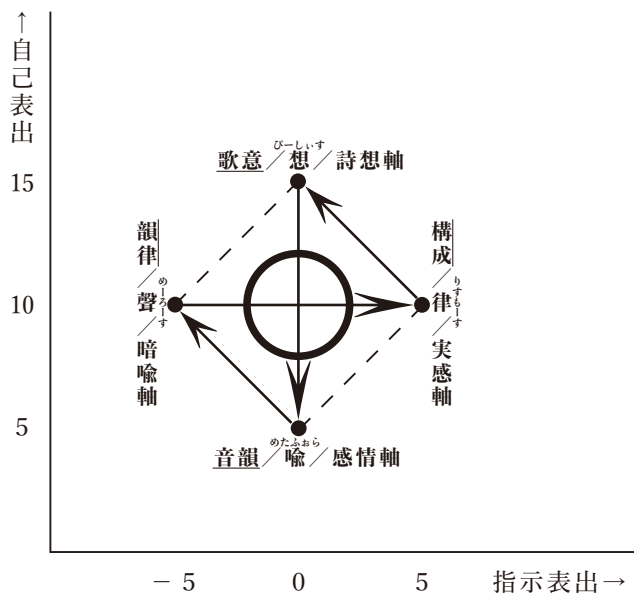
「中昔のころには、盆という時期は、死人の魂が戻って来るとともに、無縁の亡霊もやつて来ると考えた。そのため、家では魂祭りをし、外では無縁の怨霊おんりょうを追い払わねばならぬ。この考えが変化して、盆のごとく、聖霊も中一日いるのみで、追い返されてしまう。少しでも、亡霊を嫌がるそぶりを見せると、また戻って来ると考えた。戻られると厄介だから、名残り惜しい名残り惜しいという意味を口に唱えるが、実は嘘で、そう言いつつ追い払うのである」（『古代研究』）

「あく 本集には、独立に用ゐられた場合はないやうである。唯、水に關した序歌があつて、飽くとつづけた例が可なりある。単に飽満するだけならば、水の縁の序歌は使はぬはずである。『難波・潟・汐・干のなごりあくまで』（卷四・五三三）、『秋草におく白露のあかずのみ』（卷二十・四三一二）、『玉しける清き渚を汐満てばあかずわれ行く』（卷十五・三七〇六）。古今集には、あかにか、つたのがあるので、『掬ぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも』（四〇四、貫之）、『岩間行く水の白浪立ちかへりかくこそは見めあかずもあるかな』（六八二）（…）古代の地名にも、飽浦（紀伊）・飽田（肥後・筑前）・鰐田アキタ・飽海アウミ（羽後）・飽多アタなどの外に



も、安芸・阿岐・安岐・阿久津・阿久沢など到る処に見える。羽後の秋田を開田アキタだとし、常陸の飽田を飽き喫うた地だからと説いた地名説明は信じにくい。ともかく古代にあくといふ水の動作を表す語があつたことを信じてゐる。方言の比較から、この語の本義が見出されさうに思ふが、其れ迄の仮説としてあくはわくと同系の語で、意義は多少分化して、水の涸れた処へ、又、泡が噴いて、水の湧き出る容子かと思つてゐるが、或はあすと同じ語で、語尾のくとすとの転換かといふ考へも持つてゐる」

「於土左室生門崎寂暫。心觀明星入口。虚空藏光明照來、顯菩薩之威、現佛法之無二」拙訓  
「土左は室生門崎に於て暫く寂す。心を觀じ明星口に入る。虚空藏の光明照り來て、菩薩の威を顯はし、佛法の二無きを現す」普通入る、來たりて、現はす（現ず）などと訓むのを、漢字の訓み方は原理的に自由なのによつた。さらにこの序説に引き寄せて意識してみれば「高知県の室戸岬でしばらくにも籠つていた。ものいみ全しき瀬に明けの明星（金星）が口に來入つた〔ふる〕」。奥処のあかりがこうこうとやつて來て、菩薩のパワーが見えるようになり、仏のこの世に二と無きコトでからだじゅういつぱいになった〔あく〕（↓以下はる）」（文体からして「御遺告」は空海入定後の偽書という見方も強い（Cf. <https://www.mikyo21f.gr.jp/kukai-ronyu/nagasawa/post-329.html>）『三教指歸』『勤念土州室戸崎。谷不惜響、明星來影』拙訓「念おもひを土州とすは室戸崎むつとまきに勤おこます。谷たにの響ひびくを惜をします、明星あかしは影かげを來きたす」こつちが真筆）



私事ですが、わたしはここ五年ほど品川区の京急線沿線の立会川というところに住んでおりまして、すぐ近くに二つの運河があります。明治までは品川湾の遠浅海岸で「鈴ヶ森」というのが地名に遺っていて江戸時代にはここに大罪人を火炙り・串刺していた磔刑場があり、かの八百屋お七もここで弱火でじっくり潮風にさらされながら灼かれた。そこに渡る罪人の身内が最後に別れに立ち会い見送る川でしたので立会川といい現在は川と駅とその付近の名として遺っているといえます。夏といわず冬でもわたしのよくこの川（異様に汚く臭い）や運河に這入ることは性でありまた癖なようで、中高と、春のおかしな文化祭、秋にはちと変な運動会の奇しい活動に従事していたせ、から多摩川を基礎とし渋谷川や湘南や熱海や下田やと、とにかく川や海に這入りまくっていました。最近母から聞いた話では、三つ子の頃から、池水があればところ構わず這入ったとききますから宿阿です。そして流れや澱のなかでしばらくづつとしている。土佐でみそぎする巫女さんを見たときはもう自分を感じた気がいたしました。そして少しくやしくもあつた。日のくれなずみのなかひどく様になつていたからです。前章⑩でふゆとはるをどこまでも折口信夫に依拠しましたが、なつとあきについてはこの耳よき人にも判然としなかったらしく、詩人≡学者としてわからないことはわからないままに「おきになづさふ暗示をのみ遺していかけました。